2010 年度報告書（研究員）

氏　名	土田陽子
職　位	短時間研究員

研究概要

2010 年度においては、「次世代研究ユニット」に応募・採択された「公立名門高等女学校の同窓会誌における理想的女性像の構築　－和歌山市・京都市・神戸市との比較分析からー」を中心に研究活動を行った。研究内容は、関西地方の公立名門高等女学校における 1910 年代～30 年代の同窓会誌を分析史料とし、女学校卒業後のあるべき姿について描き出そうとするものである。分析対象校は、県立和歌山高等女学校（和高女）と京都府立第一高等女学校（府一）、兵庫県立第一神戸高等女学校（県一高女）を設定した。

まず、分析史料となる同窓会誌の収集を行った。和高女の史料は主に和歌山県立図書館と古書店から入手した。府一の史料のほとんどは同窓会館である「鴨沂会館」で入手したが、そこに所蔵されていないものは大学図書館と古書店で入手した。ただし県一高女の史料は入手することができなかったため、実際に比較分析できたのは和高女と府一であった。

研究結果としては、次の点が明らかになった。1910 年代～20 年代の和高女の同窓会誌には、科学的な知識に基づく家事や育児に関する記事が多くみられ、そこでは広く社会情勢を理解し、国家の一員であるという自覚や心構えをもつことの重要性が強調されていた。その際、見習うべき手本とされていたのが、西洋婦人のモダンな生活様式と社会での活躍の様子であった。しかしながら、1930 年代以降、自由で合理的で個人主義的な西洋文化は享楽的で利己主義であるとされ、否定されていった。一方、府一には、教養主義的な内容の記事が多くみられた。婦人運動に関しては、教育の機会均等のみが取り組むべき課題として取り上げられ、良妻賢母主義という基本理念から外れることなく女子教育の充実、発展が目指されていた。両校に共通して求められていた卒業後のあり方は、母校のために尽くす姿勢であった。彼女たちは同窓会ネットワークのなかで組織化され、同窓会館設立や学校設立という目的のもと、バザーや音楽会開催という名門女学校卒業生にふさわしい正統的な意義ある無償労働を母校のために提供していたことが明らかになった。

業績リスト（著書、論文、報告、その他に分けて主要なものを記入する）

＜論文＞

2010 年 10 月「1930 年代の高等女学校と旧制中学校における模範生徒像　―ジェンダー規範に着目してー」（単著・査読あり）『ソシオロジ』第 169 号　pp. 37-54

＜ワーキングペーパー＞

「近代地方都市の公立名門高等女学校における生徒文化の特徴と構造　－　学校文化と生徒文化の関係に着目して　ー」,『GCOE Working Paper 次世代研究 27』, 京都大学グローバル COE プログラム「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」, 2010 年。

＜学会発表・報告会＞

2010 年 9 月「公立名門高等女学校の同窓会誌にみる『あるべき女性像』」日本教育社会学会第 62 回大会

2011 年 2 月「公立名門高等女学校の同窓会誌における理想的女性像の構築　－和歌山市・京都市・神戸市との比較分析からー」2010 年度　ＧＣＯＥ研究成果報告会